

座談会

ITが教育にもたらすもの
—同志社の現状とこれからの方向

出席者（発言順）

寺川眞知夫（女子大学学芸学部教授）

小原 克博（大学神学部助教）

中川 好幸（国際中学校・高等学校教諭）

金谷 益道（大学文学部専任講師）

田島 繁（中学校教諭）

司会 本誌編集委員

司会 ●本日は、情報通信技術（IT）を積極的に使って教育を行っている方々にお集まりいただきました。教育機関でのIT利用が話題になっていますが、同志社の教育における情報技術活用の現状と、IT化がもたらすメリットや課題を

考えていきたいと思えます。教育におけるITをめぐる状況としては、それをどんどん推し進めていこうとする人と、それに対して懐疑的な人がおり、両者の考え方には大きな違いがあるように思います。この座談会を通して、ITによってこれまでの教育がどうかかわるのか、そして問題点があるとすれば、

それは何なのかを少しでも明らかにできればと考えています。はじめに、同志社での教育IT化の現

●女子大学に誕生した情報メディア学科●

寺川 ●女子大学は二〇〇二年四月、学芸学部内に「情報メディア学科」を開設します。この学科は、女子大学の将来構想の中から出てきました。女子大学はこれまでリベラルアーツを強く主張してきましたが、前学長は「リベラルアーツプラス」とおっしゃっていました。全人的教養教育と同時に、社会に出て活躍してい

ける力を身につける必要があるというこトです。そのため、授業以外に資格支援講座を開設するなどしてきました。更に、できるだけ少人数の学科を増やす方向とからめつつ、英語英文学科と日本語日本学科の定員を削減し、それを基にして定員百二十人の新学科「情報メディア学科」を開設することになったのです。

IT時代に対応した学科を立ち上げることで、学内の情報化のレベルアップが図れるのも重要な点です。学科の教育目標としては、第一に、自己のビジョンを持ち、その実現のためにメディアを駆使して情報を集め、しっかりと考えて目的を達成できる、メディアリテラシーを持った女性の育成があります。第二に、英語教育を基本にして世界の人々とコミュニケーションできる能力を持ち、メディアを駆使し、国内や国際社会の抱えている問題に積極的にいかかわっていきける、例えば、元国連難民高等弁務官の緒方貞子氏のような女性を育てたい。第三に、現在、情報氾濫の世の中で、ソフト・ハードにかかわる知識と運用能力を高め、批判的および客観的に情報・メディアのもつ問

題点を見ていきける女性を育てていくことです。第四に、自己表現あるいは他者の要請に応じて、映像作品やメディアアートなどの作品を制作できる能力を持った女性を育成していくことです。教員は、外部の専門の方が中心で、アシスタントも何人かお願ひして、授業に参加してもらおう形にします。他大学では、当たり前かもしれませんが、二年次以降は、学年進行ではなく、どの科目も選択できる仕組みになっています。これについては、きちつとした技術教育がなされない限り、表現能力は育たないと懸念される方もいますが、情報機器を使いこなす、自己表現できる技術を高めるためには、積み上げ教育とともに、学生が必要に応じて学べる二本柱の教育が必要で

す。そのために選択分野に応じた履修モデルカリキュラムを作成し、学生それぞれに合った科目選択を指導していきたいと考えています。二年次からは演習を中心においたカリキュラムとなっています。具体的には、異なる科目をメディアによって関連づけていく基礎的なスキルと教養教育を実践的に結びつける場としての演習を重視します。演習を二コマ続きにするなど、美術系大学で行われているような授業形態も取り入れたいと考えています。

司会 ●反響はどうでしょうか。寺川 ●先日実施された推薦入試の競争倍率は約十倍で、合格者全員が一次手続きをしています。司会 ●関心はとても高いわけですね。企



寺川眞知夫氏

てらかわ・まちお／1943年兵庫県生まれ。神戸大学卒業。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。現在、同志社女子大学学芸学部長・文学研究科長。4月から情報メディア学科主任兼任予定。専攻は日本古代文学で、記紀の神話・伝承、初期万葉集、日本霊異記を研究対象とし、表現、外来文化の受容と土着を研究している。著書『日本国現報善悪霊異記の研究』（単著、和泉書院 '96年）などがある。URL <http://www2.dwc.doshisha.ac.jp/iwanohim/>



一般の人のためにデモ版が用意されている。
<http://www.kohara.ac/>

業の反応はどうですか。
寺川●新聞社の反応が良いみたいです。会社訪問した職員は、新聞社で、ハードを使える人はたくさんいるけれども、コンテンツそのものを作れる人が非常に手薄なので期待しているという話を聞いてきています。
司会●従来の情報系の学科では、SEの養成が中心で、マルチメディアクリ

●インターネット授業の実際

小原●インターネット授業とは、端的に言えば、オンデマンド（非同期）型授業です。遠隔授業のようにリアルタイム（同期）でする授業と基本的に違います。またインターネットを使用するところに特徴があります。授業の仕組みは、リアルシステムのサーバを使い、ストリーミングでビデオ配信しています。配信される画面構成は、画面の左下に、小さなビデオ画像があり、パソコンで見る画面はVHSとほぼ同じで、非常にクリアです。学外からも見られ、音声ははっきりしています。画面の右には、パワーポイント

エィターやCGアーティストなどの人材があまり養成されてきませんでした。だから、知識と技術を持った人材育成を可能にする情報メディア学科への反応がいいのでしようね。
 話題提供のお二人目として、二〇〇一年度同志社初のインターネット授業を行われた小原先生、体験などをお話しください。

を使ったプレゼンテーション画面が、ビデオ画像での説明に応じて変わっていく仕掛けになっています。
 教室で配布しているような紙の資料は一切なく、すべてがPDF形式でデジタル化された資料です。履修者は、それをダウンロードして資料として使います。授業内容を見てもらった後、ClassNetという同志社大学の授業補助のためのシステムを使って、質疑応答やディスカッションをします。

私は毎回の授業で、小レポートを提出してもらっていますが、その提出も

ClassNet上で行います。なぜそのようなことをするのかといえば、教室授業と違って、出欠確認ができないからです。授業を見たかどうかを確認する意味で、授業を元にした課題を作り毎回提出してもらっています。教員としては普通の教室授業よりはるかに負担感があります

が、学生からは達成感はかなりあったという感想をもらいました。その一人ひとりが提出したレポートを匿名でWeb上で公開しています。レポートは提出後すぐに公開されますので、他の学生がそれを参考にできるというのも、従来の授業にはない利点です。他の学生の物の見方が分かるというのは、教育的に大きな意味があると思います。

現在の私のクラスは、大学コンソーシアム京都に対して提供されている科目なので、同志社大学の学生だけでなく、京都の他大学の学生も単位互換制度を利用して登録していますし、一般社会人の方々も登録しています。

パーソナルな学習の実現

小原●インターネット授業のメリットを教室授業と対比させて述べますと、教室授業は基本的に今までマス・ラーニングで、本学も残念ながら、

【用語解説】

*オンデマンド利用者の要求があった時にサービスを提供する方式。WWWやメールをはじめとするインターネット上のデータ配信は、ほとんどがオンデマンドで行われている。

*リアルシステムのサーバリアルプレイヤ（動画再生ソフトの一種）で再生できるファイル、ストリーミング（次項で解説）で配信するためのサーバ。

*ストリーミングインターネットなどのネットワークを通して映像や音声などを視聴する際に、データを受信しながら同時に再生を行う方式。従来、このような映像や音声を見聴するには、すべてのデータを受信完了後に再生していたため、電話回線などはできなかったが、ストリーミング方式のソフトを使えば、低速回線でもマルチメディアデータをリアルタイムで視聴できるようになった。

*PDF【ジャーディーエフ・Portable Document Format】アドビシステムズ社

によって開発された、電子文書のためのフォーマット。レイアウトソフトなどで作成した文書を電子的に配布することができ、相手のコンピュータの機種や環境によらず、オリジナルのイメージをかなりの程度正確に再生することができる。文字情報だけでなく、フォントや文字の大きさ、色、画像、それらのレイアウトなどの情報を保存し、利用者に提供できる。つまり、教室で従来配布していた資料を、ほぼ同じ形でパソコン上で表示でき、またそこから印刷して各自利用することもできる。PDF文書の作成には同社のAcrobatというソフトが必要であるが、表示に必要なAcrobat Readerというソフトは、無償で入手できる。

*ClassNet同志社大学独自の双方向授業支援システム。各クラス毎にWebページが用意され、授業を登録している学生と担当教員がWebを介して双方向に文書やその他のデータをやり取りする。電子掲示板を利用した教材配布、質疑応答、ディスカッション、課題の提示とレポート提出、問題の提示と回答提出などで利用されている。



コミュニケーションセンターでの授業の様子

ンセンターがあります。教員三人、職員九人の計十二人で、コミュニケーションセンターにおける授業の支援や生徒の学習支援をしています。

私は今までの日本の教育は、レクチャーに偏りすぎていたと思っています。コミュニケーションセンターが目指す学習活動は、まず「リサーチ」から始め、その内容を基に生徒同士で話し合いなが

ら、「コンストラクト」していき、でき上がった作品を「プレゼンテーション」するといった、大きく分けて三つの点が挙げられます。さらに、生徒が作り出した作品を共有していく場、つまりミュージアムあるいはギャラリー的な場を作っています。

コミュニケーションセンターの特徴は、ノート型パソコンを館内貸出するなど、一つの場所で、パソコンや本、ビデオをはじめとしたさまざまなメディアを駆使でき、題材によってメディアを使い分ける力を養います。

通常の授業でもこの施設を利用してできますが、一つのクラススペースは、レクチャー形式の授業が成立しないような形で、情報コンセントが付いた八人掛けの円テーブルが六つあり、学習活動が自然に行える空間レイアウトになっています。教員一人ひとりに一台ずつノート型パソコンを貸与しており、教員全員がパソコンを使えるレベルなのですが、授業で利用するのは難しい点もあり、利用状況は全教員の一五〇%ほどです。生徒は昼休みや放課後に来て、レポート作

成に利用しています。総生徒数は千百人なのですが、入館者が千六百人の日もあり、生徒一人につき約一・五回来ている日があったりと、生徒に良質のサービスをすれば、来館してくれると考えています。

コミュニケーションセンター部の校務としては、高校一年生の必修科目「コミュニケーション&メディア」を担当します。私も受けもっている一人で、先程述べた学習活動を通じて、他教科の授業で各メディアを有機的に生かすことができ、力の育成に努めています。他にもプロジェクトを共同して作り上げていくコラボレーションへの慣れ、メディアリテラシーの向上などがあります。

今年度の授業では、グループでの商品開発プロジェクトに取り組みしました。新しい冷蔵庫を開発するのなら、冷蔵庫の仕組みや開発の歴史を調べ、さらに売れ筋の冷蔵庫を分析するためにメディアを使ってリサーチし、それを基に新しい冷蔵庫について話し合っただけでいきま



小原克博氏

こはら・かつひろ／1965年大阪府生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士（神学）。現在、神学部助教授。専門は、キリスト教思想、比較宗教倫理学。現代社会が直面する先端的課題に対し、フェミニズム、生命倫理、エコロジーなど多様な学問領域を切り口にしながら応答を試みている。近著に『神のドラマトウルギー—自然・宗教・歴史・身体を舞台として』（教文館 '02年）、『キリスト教と現代—終末思想の歴史的展開』（共著、世界思想社 '01年）、『E U世界を読む』（共著、世界思想社 '01年）などがある。URL <http://www.kohara.ac/>

千人を超えるような授業があり、これは学生にも評判がよいとは言えません。そういったマス・ラーニングに対してインターネット授業は周囲の私語や雑談に煩わされず、自分がしたい時に、各自のペースでできるパーソナル・ラーニングの特徴をもっています。

教室授業は九十分という決まった時間、座って聴くわけですが、人間の集中力はそんなに長くは続きません。しかも、途中で分からなくなっても「先生、そこちょっと分からないから待ってください」と言えず、リニアな授業を受動的に受けるしかない。インターネット授業の場合、九十分の授業をテーマごとに小さく区切っているので、今日は三十分だけ残りは明日見たり、分からない箇所は

繰り返し見ることができず。つまりノリニアな学習ができるわけです。

他の学生のレポートを参照できる、あるいは会議室上でディスカッションできるといった双方向性もあります。教室授業の一人ひとりの学習成果は、学期末においてレポートや試験で試されるわけですが、その学習成果は、その個人に私有され、記憶の中から失われれば、散逸していくこととなります。しかし、インターネット授業では、デジタルデータとして保存され、公開されていますので、二

十年後の学生が、二〇〇一年の学生の考え方を歴史的な資料として見ることもできるようになります。レポートがデータベース化されることによって、知的な財産に転化していく可能性があるので。

私のインターネット授業の正式なページは、見る際にID、パスワードによる認証チェックがかかりますが、高校生やマスコミ向けにデモページを設けています。

司会●続いて中等教育におけるIT化について中川先生、お願いします。

●中等教育とIT—創造と情報発信●

中川●国際中学校・高等学校での情報教育あるいはIT教育は、こだわりがあつ

てコミュニケーション教育と言っています。その拠点として、コミュニケーション



中川好幸氏

ながわ・よしゆき/1962年京都府生まれ。'84年同志社大学文学部英文学科卒業後、'88年ニューヨーク州立大学 Fashion Institute of Technology 広告コミュニケーション学科卒業、'00年ハーバード大学教育学部大学院 Technology in Education 専攻 修士課程修了。'90年から同志社国際中学校・高等学校英語科教諭に着任。'01年からはコミュニケーション部主任を務める。
URL <http://www.nakayoshi.org/index.html>

マーシャルやポスター制作を行っています。

小原先生もおっしゃいましたが、生徒の作品を共有化していくために、Web上で公開しています。Web上で他生徒の作品をみると、ワードが立ち上がり、コメントを書けるシステムを作成し、そのコメントに対しても、コメントが返せる仕組みになっています。自分の作品を他人に読んでもらえ、作品に対するコメントが見られるわけです。クラス内だけで見られるようにパスワードを掛けた方が良いのか、あるいは全体に見せてもいいのかと生徒たちに聞くと、多くの人が見てほしいという答えがほとんどです。こうした作品づくりを通して、学習者自らが知識を構築していきます。従来の伝

統的な教育は、教師が知識を橋渡ししてそれを生徒が覚えるという形が非常に多かったのですが、そうではなく、学習者自らが何かを作っていく過程で、学びが起これると思うんです。問題を与えられて解く「問題解決」ではなく、自らが問題を探していく「問題発見」が大切なのです。

「情報教育」とくくられた時に、コンピュータの操作だけを教えがちです。そうではなく、情報教育とは、各メディア特性を理解して、情報を見ていくこと。それに加えて作り手になるのが非常に大事です。例えばビデオ映像の作り手になれば、テレビを見る時でも、編集されているほんの一部しか放映されていないのが分かります。内容も批判的に見てい

ます。Webも同じで、見せ方、情報のまとめ方を考えて制作することで、より深く見られるようになります。

司会 ● コミュニケーションセンターは、いつ開設されたのでしょうか。

中川 ● 四年前の一九九七年九月に開館しました。その時中学に入ってきた生徒は現在高校二年です。手軽に利用しており、先生方も授業で利用するのに慣れてきています。

司会 ● ありがとうございます。本日は三人の先生のほかにも、ITを積極的にとりあげていらっしゃる先生がご出席です。まず、金谷先生から外国語教育におけるITについてお話ししていただきませう。

外の世界と交流していく

金谷 ● 私は、英文学科に所属していますが、英語の運用能力の向上に、情報処理実習教室を使用するなど、ITを授業で利用しています。二〇〇一年度から、英語リスニング能力向上のために、我々で作成したCD-ROMを配付して、動画の再生をさせた後、問題を与えて、学生たちがそれに答えていく形式の授業を行っています。三十五人のクラスなので、できるだけ一人ひとりの発音を学生のヘッドフォンに付いているマイクから拾い、指導して発音能力の向上も図っています。他には、オーストラリアのウーロンゴン大学で日本語を学習している学生と、リアルタイムで英語と日本語の両方を用いたWebチャットを行っています。毎回さまざまなトピックについて、意見交換をしています。また、英語教師を目指す学生を対象にしたIT授業も提供しており、教育現場が必要とされるエッセルを使った成績管理やホームページ作成などコンピュータリテラシーを高めています。

ITには、ウーロンゴン大学とのWebチャットをはじめ、小原先生のお話にもあった大学コンソーシアム京都などのように、大学内部だけでなく、学外との交流が簡単にできるメリットがあります。

ITとコミュニケーション

金谷 ● ただ、教師がコディネータの役割しか果たせなくなっているのではないかと、感じる時もあります。ウーロンゴン大学とのWebチャットでも、学生同士がディスカッションしている間、教師はモニター役です。リスニング授業でもノートテイキングの作業に時間が掛かるので、ITを使った授業では、教師と学生とのコミュニケーションが希薄になっているのではと感じる時があります。学生の自習時間が長いために、従来の講義型の授業と比べて、学生の理解度を把握しにくいようにも思います。

小原先生の授業は、私たちの語学を教える授業とはタイプが違いますが、コミュニケーションの希薄さに問題点を感じられたことはあります。

小原 ● 私は、語学教育におけるITの利用にすごく関心があって調べてみました。例えば、NOVAの「お茶の間留学」をはじめ、インターネット上で自主学習できる英語教材はたくさんあるんです。実際に使ってみて思ったのは、完成度が極めて高いということです。マシンがすべてやってくれるため、語学教師の存在感が危うくなるのではないのでしょうか。教師がコディネータの役割しか果たせなくなっている現状は、ITとの関連で言いますと、ますます加速されていくと思います。語学を教えるとは何なのかが、この数年の内に根本的に問われるでしょう。

金谷先生は、ITを利用した授業でコミュニケーションが希薄になっているのではないかとおっしゃいましたが、私がインターネット授業を始めた時にも、多くの方が危惧されたのは、人間味がなくなるのではないかと、ということでした。実際は逆でして、百〜二百人いる教室で授業するより、インターネット授業の方がはるかに人間味があります。毎回学生が提出しているレポートには、コメント



金谷益道氏

かなや・ますみち／1966年三重県生まれ。同志社大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程前期修了。現在、文学部英文学科専任講師。専門分野は19・20世紀イギリス小説。最近は、創作プロセスにおける作者の存在とは何か、といった問題を研究テーマにしている。著書（共著）に『イギリス文学への招待』（朝日出版社 '99年）。

にその人の肉声の微かに吐露されている、精神的な繋がりができてくるのを感じます。通常の大教室授業では、得ることができない経験であって、むしろコミュニケーションが親密になつていく可能性があると感じました。

また、学生の理解度の把握が難しいとおっしゃっていましたが、Web上で学生にレポートを出してもらったり、あるいはディスカッションに参加してもらうことで、どの程度学生に受け止められているのかを、その都度、自己点検できま

大規模授業とインターネット

金谷●なるほど。特に大教室の授業にインターネット授業は効果があるわけでは

れるなら、大教室講義での双方向性教育という効果をあげられますね。

小原●それは、すぐに実現できます。携帯電話を使うシステムにしたらいのです。分からなかったら、携帯でピピッとメールを打ってもらって、大型ディスプレイに映るようにすればいいわけです。

司会●なるほど。インターネット授業、あるいはIT化には、大教室での対面授業の希薄な部分を解消できる可能性があるということですね。

小原●インターネット授業のキャッチフレーズの一つは「脱教室」です。そのために大学側が、いつでもどこでも見られることを最大限保証する教育環境を整えていくべきだと思います。例えば、無線LANを導入して、キャンパス内なら、どこにいてもノート型パソコンやPDA、*FOMAのような次世代携帯でネット授業が受信できるようにもできるでしょう。現在、インターネット授業で最先端の技術を取り入れています。今後の本格的なラーニングを考えると、今はまだまだ初期段階であつて、我々はよう

ね。私の授業は少人数です。小原先生との授業形態が違い、比較は難しいと思います。ただ、小原先生がおっしゃるように、語学のIT教材はかなり完成されていて、教員の入り込む余地を減らしてしまい、生徒とのコミュニケーションを希薄にしているのは確かなことです。

寺川●小原先生は、インターネット授業で毎回全部のレポートを見られるのでしょうか。

小原●はい。しかし、一人の教員ができる範囲には限界があり、百人くらいが上限ではないでしょうか。アメリカの大学では、千人を超える履修生を抱えるインターネット授業がありますが、「メンター」という、教員を補助するアカデミッ

やくIT化の原始時代を歩き始めたところなんですよ（笑）。

司会●お話が、大学教育に集中してしまいましたが、田島先生、中学ではどうでしょうか。

リアルとバーチャル

田島●九五年に、野本理事長が年頭のあいさつで、「これからはインターネット時代で、社会が大きく変化して、教育も大きく変わるだろう」とおっしゃられ、漠然とイメージしていただけなのですが、九七年に大学のパソコンバージョンアップにもない中学校でその古いパソコンを使用できるようになりました。

その年に新聞で、ニューヨークのスマスタン中学校の生徒がストックマーケットゲーム、いわゆるバーチャルでの株の売買を、新聞記事を見ながら生き生きとして行っている記事を見まして、これだと思いました。パソコンを活用して、ストックマーケットゲームを日本でできないか野村證券へ電話しました。するとその春からリアルタイムの株価を使って、バーチャルで株を売買できると聞いて、

クなスキルの高い人が、授業ごとに配置されています。そういう体制があれば、基本的に授業規模は大きな問題にはならないでしょう。

司会●大学の法・経済・商などの学部では、パワーポイントを使って授業をされている先生がかなりいますが、これは黒板で書く代わりをしているだけで、一方通行的な授業です。実際、数百人に教えていると学生が授業を理解しているかどうか、授業中にはまったくつかめません。しかし、学生の席にある端末と教卓とを結ぶデジタルの情報処理システムがあり、教卓のディスプレイ上に学生の分からない点が瞬時に表示されるようになれば、教員は教壇の上にながらにしてそこを詳しく説明できる。条件さえ整備さ

【用語解説】

* PDA 【リーダー・パーソナル Digital Assistance】 手のひらサイズの超小型の携帯電子機器で、入力・通信端末機能など、パソコンのもつ機能を備えている。液晶表示装置や外部との接続端子を搭載し、電池や専用バッテリーで使用できる。

* FOMA 【フォー・Freedom Of Mobile multimedia Access】 NITドコモが二〇〇一年五月に試験サービスを開始、十月から本サービスを開始した、世界標準規格IMT-2000に認定されたWCDMA方式を提供する携帯電話サービス。携帯電話の世代としてはアナログ方式、PDC方式に次ぐ第三世代と言われている。高速大容量のネットワークでサービスを提供できるのが特徴で、音声とリアルタイムな映像による相互通信ができるテレビ電話が実現。「モード」サービスがさらに進化し、高速な通信速度を生かして、スポーツのハイライトシーンや話題のロードショー映像など、様々な動画や音声を取得して楽しむこともできる。通話についても高品質になりクリアになった。



田島 繁氏

たじま・しげる／1943年愛知県生まれ。同志社大学経済学部卒業後、東京の桜美林高校で政治経済を2年間教え、'68年に同志社中学校に就職し33年間経済を専門に教える。'97年から授業に取り入れたバーチャル株式投資ゲームがNHKや日経新聞などいろいろなメディアで紹介された。今年から「日経ストックリーグ」全国大会の生徒指導に熱を入れ、中学部門で、同志社中学校の小林真悠子チームが全国1位を受賞した。

試しにやってみました。面白くてはまっ
てしまいました。有志の生徒を募り三十
人ほどで十月に始めてみると、昼休みや
授業の合間にも生徒が売買に来、熱気ム
ンムンでした。これはいけると確信しま
した。翌年夏、中学校では、LANが構
築され、全員がIDパスワードを持つこ
とができるようになり、ノート型パソコ
ンも新しく入ったので、秋から経済の授
業に取り入れ、三年生全員が株の売買に
挑戦し始めました。

ストックマーケットゲームの授業を四
年ほどやってきて感じたのは、やはり生
徒は受け身では満足できないということ
です。生徒自らが株をバーチャル売買し
始めると、新聞、特に日経新聞などを読
み始め、生き生きとしてきました。

中川●学習に興味が湧くのは、今やって
いる学習の先以外の世界と関わっている
のが見えた時だと思っております。そういつ
た意味でも第一線で活躍されている方が
講師になることは必要です。

田島●東京の私立のある小学校では、第
一線で活躍している画家を先生として迎
え、本物との出会いの場をもうけていま
す。私は、「ようこそ先輩」という特別
授業を設けました。日本ペルー石油会社
の社長さんが、母校で授業をせひやらせ
てほしいというので、四クラスでそれぞ
れ四十五分授業をしていただきました。
騒がしいクラスも、静まりかえって、質
問も多く出ました。やっぱり現場で活躍
している人の話は、インパクトがあると
思いましたね。

中川●今までは、インターンシップとい
う形で学外に出ていったのですが、これ
からは、教室の中にながらにして、教
室の外の事実を見て学んでいく形になる
のではないのでしょうか。

司会●現地に直接行って見ることに疑似
体験のもつ意味合いは、それぞれ独自に
あるように思えます。例えば、同志社大

これからの経済教育には、インターネ
ットを使ったストックマーケットゲーム
は、すごく意味があると思います。バー
チャルな株の売買を通して、友達同士語
り合い、今後の推移を予測する。あるグ
ループは「余暇を楽しみ、景気回復の予
感」というテーマで、学校や企業が完全
週休二日制になり、日本人の余暇が増大
し、その余暇の増大を享受するであろう
企業の銘柄を買っていく。二十一世紀
はバイオの時代だ」などそれぞれのテー
マを設けて、これからの社会をいろんな
新聞記事やインターネットで検索して、
考えていく。「考える授業は楽しい」と
生徒は書いていました。

やはり自ら学んでいくのを、生徒・学
生たちは、望んでいるのではないでしょ
うか。
これからの経済教育には、インターネ
ットを使ったストックマーケットゲーム
は、すごく意味があると思います。バー
チャルな株の売買を通して、友達同士語
り合い、今後の推移を予測する。あるグ
ループは「余暇を楽しみ、景気回復の予
感」というテーマで、学校や企業が完全
週休二日制になり、日本人の余暇が増大
し、その余暇の増大を享受するであろう
企業の銘柄を買っていく。二十一世紀
はバイオの時代だ」などそれぞれのテー
マを設けて、これからの社会をいろんな
新聞記事やインターネットで検索して、
考えていく。「考える授業は楽しい」と
生徒は書いていました。

学で学ぶ場合に、キャンパスや今出川の
レンガの建物を見ながら、「ああ俺は、
同志社の一員になってこれから勉強する
んだ」と感じる。これは、バーチャルで
はなかなか体験できない。通信教育にス
クーリングがあるように、棲み分けをし
て、相乗効果を上げていくことが必要で
はないですか。
小原●ただ何にリアルさを感じるかは、
世代によって違うと思うんです。携帯
世代が、コミュニケーションに帰属感を持て
るといえば、持っていないでしょう。彼ら
は携帯やデジタルなキーでつながってい
るのがより近さを保証する第一義的なも
のになっています。もう「場所」ではあ
りません。そんな世代が育ってきている
現状も考える必要があります。ですから、
リアルとバーチャルが混在しながら、進
んでいくのではないのでしょうか。

教育のIT化と条件整備

田島●小原先生は、学生に毎回レポート
を提出させて、それに目を通す大変な仕
事をされていますが、インターネット授
業を意欲的にすればするほど、教員の仕

うか。
司会●インターネット授業だと、現実の
ものと触れ合う機会が少なくなっていく
かもしれないものもたくさんあります。
に出会えないものもたくさんあります。
中学生が実際に株を運用することはでき
ないので、インターネット授業を通じて、
疑似体験ですが、株売買が可能になると
いうことですね。
田島●そうです。生徒の授業に対する感
想の中には、経済という難しいイメー
ジがあるけれど、ストックマーケットゲ
ームをしていると抵抗なく経済の授業に
入っていったという声もありました。
司会●関心を持たせるとい意味では、
インターネット授業はすごく効果がある
のですね。

事量は増えていきますよね。
小原●今年は初年度だったこともあり、
すさまじい負担感でした(笑)。いろい
ろトラブルもありましたしね。制度面が
整えられていない中でスタートしなくて
はなりませんでした。

大学から小学校まで広範囲にインター
ネット授業をしていくには、スキルを持
った人だけでなく、やる気があれば簡単
にハードルを越えられるような工夫が必
要です。教員にすべてまかせるのではな
く、コンテンツを作成し配信する際のサ
ポートシステムが充実しているかどうか
で明暗が決していくと思うのです。

アメリカでは、これを五、六年前から
始めていて、バーチャルユニバーシティ
やインターネット授業で名を挙げている
大学は、サポートシステムが非常に充実
しています。さらに自由競争の結果、淘
汰が起り良質の教育コンテンツだけが
生き残っています。今や教育コンテンツ
は、教員一人で作成する時代ではないと
感じています。

寺川●そこが一番大切だと思います。実
際に教員が全部一人でやるとしたら、多

忙なために、授業そのものに影響がでてくるでしょうから。

中川●ネットワークを用いた授業は、実際手が掛かります。小さなトラブルでもこちらの消耗は激しい。

司会●現状を打開するためにも、いかにして大学と教員が共同して広いコンテンツを作っていくかが課題ですね。

小原●私は、インターネット授業を経済学部の宮崎先生と一緒にしてきましたが、順風満帆というより逆風の中を歩んできた思いが強くなります。同志社大学が大きくなることでスケールメリットは当然ありますが、スケールデメリットもあるわけです。つまり新しい事をなかなか始められない。しかし、同志社には新しい教育スタイルを示していく使命があると、私は思っています。今年一年間、インターネット授業のコンテンツを作成し、公開して配信するプロセスの中で、いかに魅力的に伝えられるのかという検討を含め、やはり職員の方々との密接な情報交換をしながら進めていかなければならないと痛切に感じています。

司会●大学の事務組織が教育のIT化に

時間をゼミのような少数人数の対面授業に充てた方がいい。今のあり方を引きずっていくのではなく、メリハリをつけて、インターネット授業と、教員と学生とが膝を交えて付きあうような授業の、両方をより充実させていく、このような両輪を備えるところに同志社らしさが出せるのではないのでしょうか。

司会●十一月頃に、ITを使った教育についてのアンケートがあったのですが、さまざまな授業形態を区別するような設問がぜんぜんなく、どういう形でITを使っているかだけを尋ねていました。講義形式でITを使う場合と演習形式で使う場合とでは、ITの使い方も違ってきます。学生が数百人いる大教室授業では、インターネットを用いて、双方向性や共有化および教育内容が保存されることによって、問題はかなり解決するはずですね。

寺川●デジタル化が進めば、大教室はいらなくなってくるかわりに、演習室はもつと違う形で充実されていかなんといけないでしょう。演習室は、今はたいてい机ですが、授業形態に合わせた教室

どう関わるかという課題もありますね。例えば、学生の科目登録のために膨大な労力が投入されていますが、インターネットで登録するようにはできないのでしょうか。

小原●授業登録は各学部ごとに異なっていて非常に複雑ですが、いったんオンライン化すれば、必要な労力は激減します。四〜六月は事務の方々には本当に大変です。そういうエネルギーを、教育内容を作る手助けをするような方向にむけられるシステムが必要ですね。

司会●IT化は、今のシステムを全部IT化するのではなく、IT化を一つの契機として、今の教育、管理システムを見直す良い機会ですね。女子大学の入試ではインターネット出願ができるようになっていますが、事務もIT化を進めてもらって、必要なところに人材を活用していくべきでしょうね。

これまでの教育方法とIT化された教育

小原●今は目新しいので、IT化の方法自体が注目される時代ですが、結局は教育の自身が問われていきます。今は、大

を作る必要があります。

金谷●インターネット授業と今までの伝統的な講義形式の授業の併用ということに関して、また、語学の話になりますが、先ほど言ったようなIT授業はバーチャルな授業ではありませんが、学生の関心は高いと言えます。映像や音声を多く取り入れている点が人気の秘密だと考えています。しかし、私は、多映像や多音声だけで語学の運用能力が飛躍的に伸びることはないと思います。やはり相互補完的な関係が存在するのであって、伝統的な講義などリーディングでポキッブライを増やし、文章理解力を高めなければ、リスニングやスピーキングの能力も、なかなか向上しません。

司会●例えば、専門書を読む方もそうですよね。学生でしたら、読むのに三カ月から半年かかる書物を地道に一ページずつノットを取りながら読む作業を通して、本に書かれている内容が分かり、そしてディスカッションしながらさらに理解していく授業は残っていくでしょう。マスプロ教育の大教室講義のほうは、インターネットやITを使った双方向型の

学に対する評価基準として偏差値がついてまわっています。五〜十年後には、各学校でどのような授業がなされているかが丸見えになる時代が来るでしょう。教育の質が評価基準になる時代がもうすぐやってきます。各専門分野内における教員のランキングというものが出てきますよ。また、インターネット授業を別々の大学で履修して、その修得単位で学位を取得できるようにするでしょう。大学としてのプレステージは、どれだけ良質の教育コンテンツをもっている教員を擁しているかに懸かっているといつても過言ではありません。

寺川●インターネット授業がこれからさらに進展していきますと、大学から学生がいなくなるのか、それとも学生を集めるための授業は残っていくと思いますか。

小原●それは、相互に補うべきですね。なぜ私がインターネット授業を進めようとしているかといえば、先ほどの話のように数百人の大教室講義は学生に対して望ましいことではなく、それはインターネット授業に取って替わった方がいいと考えるからです。その結果生み出された

講義が変わっていくのでしょうか。
寺川●大講義での知識教育をしている授業はなくなっていく、データ化されていくのではないのでしょうか。

同志社内での交流を深める

田島●教育の効果を上げるのは、バーチャルな面だけではなく、同志社中学校の自由研究での実地調査があります。大阪証券取引所や松下電器技術館など生徒が実際に見て、そこでの体験学習も大切です。国際中学校・高等学校のマルチメディア授業を見学したとき、充実したスタッフで、うらやましい授業内容に、同志社中学校はこれでもいいのかと思います。中学校の図書情報教育部は、専任が一人、嘱託が一人、他二人の計四人です。高等学校は今マルチメディアの設備が十分でないのに、中学でのバーチャル投資の授業は継承できない。しかし、二〇〇四年度には高等学校に「情報センター(仮称)」が完成し、情報教育が本格的に始動します。今後中高合同の体制をどうするかという課題もありますね。

小原●これは中高だけの問題ではなく

て、一貫教育とは何かという問題です。同志社全体として、どういったITの取り組みができるのかという見取図がまったくないわけです。しかし、同じ法人の中にありながら、IT化に高低差があり、あつちの方がうらやましいと思う感覚は本来おかしい。中高だけではなく、大学と高校の教育をどう接続するかを考える必要があります。バーチャルという感覚を用いてブレイクスルーできるのではないのでしょうか。同志社でもできるはずですよ。大学生が教職免許の関係で教えないつたりすることはありますが、もっと日常的な交流が必要です。中学生、高校生が発する問いは、素朴だけれどもストリートで力があります。それは理科や社会、聖書など何でもいいんですが、その質問に大学生が応答していくことのできるような仕組みを作ってはどうかでしょうか。その交流の中で、新しい同志社の知のあり方が見えてくるはずですよ。これは、ITによって実現可能で、今後取り組んでいくべき価値のある課題だと思います。

教育のオープン化と情報の共有

司会●これまでのお話しを聞いておると、教育のIT化は教育のオープン化につながっていることが分かりました。大学・高校・中学が全部オープンになっていくことによって、これまでにない新しい形の教育が生まれてくるような気がします。さらにIT化が押し進める教育のオープン化は教育を受ける機会を大きく増やすことになります。例えば、これまで大学教育を受けることができなかった人たちも、すべての単位をインターネット授業で取って、学位が取れるように日本の大学もなっていくでしょう。対面授業の良さが失われるという心配については、情報通信技術を活用した教育との棲み分けをうまくすることで、両者が相互に刺激しあい、活性化していく可能性があります。ともかく、教育のIT化・オープン化は人々の教育への関心を刺激することは確かです。まさに社会全体における教育の活性化とも言えるのではないのでしょうか。

さらに、小原先生と中川先生のお話を

も参加資格ができ、二十一チーム、八十一人が参加しました。国際高等学校、大学が二チーム、女子大学も参加していました。同志社内に参加したすべての人たちに呼びかけて話し合いができれば面白いですね。中学や高校といった枠がなく自由な発想で交流できます。

小原●いろんな分野でできると思いますが。例えば、オンラインでバーチャルな交流をしておいて、実際に法人同志社を縦断するような共同のゼミをできるとか。中高大が来て、同じテーマで話し合う。恋愛論でも何でもいいんですよ。目に見える形で実現していく必要があると思えますね。

中川●東京の幼稚園から大学まである私学ですが、ソーラーカーの選手権にすべての学生が参加しています。同志社でも大学の施設を中学生でも使えるような縦のいろんなプロジェクトが一緒にできることを期待しています。

田島●昨日同志社中学の生徒会が中心となって、ペットボトル廃品を集め、ものすごくクリスタルなクリスマスツリーを作ったんですよ。マスコミが二社取材し

聞いて興味深く思ったことがあります。小原先生のインターネット授業では、学生にレポートを書かせてそれをオープンにする、つまり、学生が授業を通して自分を積極的に表現できるということですよ。中川先生のご報告でも、生徒たちは自分たちでリサーチして、その結果を学内だけでなく、学外すべての人にも見せていく。学生や生徒はともオープンですよ。それに比べて教員の方はどうでしょうか。学生ほどオープンではないように思えます。自分の授業をIT化によってオープンにすることは、これまでの授業を見直す必要が出てきますから、IT化に積極的に関わることは、授業に対する教員の意識改革や授業内容そのものの改善をもたらす可能性があるはずです。これもIT化がもたらす効用のひとつですね。

金谷●情報を多くの人と共有することはそれだけ多くの視点が集まるということですが、多面的な意見が得られるなど、多くの利点があると思います。しかし、ネット上で不特定多数の人と共に情報を共有することには、特定の個人をいわれのな

てくれました。環境問題にかなり中学生も興味を持っています。大学も中学も同じキャンパス内にあるので、大学で環境経済学を教えていらつしやる郡嶋先生など、大学の先生方が中学生に働きかけていただいて、中学生がそれを実践していけば面白いですね。同志社が総合学園となることで、それをメディアにアピールしていくことが大切だと思います。

小原●大学生は今の中学生・高校生が何を考えているかすごく興味があると思います。一方中学生にしても大学生がどんなことを考えているのか興味がつくとあるでしょう。世代を超えた交流というのは、人間を刺激すると思うんですよ。

中川●中学三年生の生徒が経済学を分かりやすく絵本に描いたんですけど、それをWebに載せたところ、学校にメールが届きまして、東京大学の経済学部の学生が「中学三年生の生徒に、こんなすごい作品ができるんですか」と書いています。生徒も喜んでいました。大学生が中学生の作品を見るといふ今まであまりなかった形を新しく広げていく可能性があります。

い攻撃にさらしてしまう危険も伴います。小原先生は匿名で学生のレポートを公表されたということですが、匿名での公表というのはこの点で参考になると思えます。

司会●本日は、教育におけるIT活用を積極的に推進されてきた先生方の貴重なお話しをお聞きすることができました。実例を通して、現在の状況がどのようなものなのか、具体的なイメージとして持つことが出来ましたし、IT化の重要性や課題も認識できたように思います。

同志社におけるIT化への取り組みが、単にこれまでの授業形態を変えるところのことだけで終わることがないように注意しなければなりません。お話しをお聞きして、IT化によって同志社ほどのような教育を目指すとしているのか、教職員全員で考える必要があるように思いました。先生方には今後も、同志社での教育におけるIT利用について積極的にどんどん発言していただきたいと思えます。

本日はどうもありがとうございました。

同志社大学における事務処理のIT化 ―教務システムを例として―

原 真一
(大学教務部教務課教務係長)

本学ではいくつかの事務システムが稼動していますが、なかでも扱うデータ量、運用に関わる職員数から見て、最も大規模なものは教務システムであろうと思います。

現行の教務システムは、一九八九年度から開発に着手し、一九九三年度から稼動していますが、それ以前のシステムに比べて、データベースの利用、プログラムの部品化によるシステム保守の効率性の向上、オンライン処理とデータ入力の学内処理化による処理速度の向上を達成しています。各学部・研究科事務室や教務部等では、このシステムを利用し、学生の学籍情報の管理、開設科目情報の管理、科目登録処理、出席簿出力や休講情報処理を始めとする授業運営業務、定期試験業務、成績管理、免許・資格課程業務等を行っています。このような多様な処理を電算処理で行うことは、本学のような大規模な大学では事務処理の効率化に多大な効果があると考えられます。

大型計算機を中心に運用してきた教務システムですが、ここ数年運用面で少しずつ変化が見られるようになってきました。

例えば、休講情報や期末試験情報のWeb上での公開や証明書自動発行機の導入、双方向授業支援システム(CaseNote)クラウド(スネット)の稼動等です。これらのシステムは全て元のデータを教務システムで管理していますが、そこから必要な情報のみをサーバに配信して運用しています。このようなことが可能となったのは、最近のITの発達による端末の処理能力の向上と、専門的な知識をさほど要求しない情報処理ツールの登場によるところが大きいと言えます。

さて、ここで取り上げたクラウドネットは、教員と学生がWEBを介して双方向に文書やその他のデータをやり取りするシステムで、今年度から実施されているインターネット授業の中でも教材配布、質疑応答、課題提出等で利用されています。利用者は教員や学生であり、教育ツールに位置付けられるでしょう。また、休講情報や試験情報のWeb上での公開や証明書自動発行機の利用者も学生です。従って、これらのシステムは事務システムという範疇を超えたものかもしれません。

これまで業務の電算化は情報を処理し、管理・提供する者の省力化に貢献してきましたが、ITの発達には情報を利用する側へのサービスの多様化をもたらし、利用者を中心とした情報活用の可能性の拡大に寄与しています。これからも、教務システムの管理する情報を利用して、Webや携帯電話を利用した科目登録や個人の成績確認、休講情報や期末試験情報の閲覧等、サービスの拡大は続くでしょう。そのためには、サービスを提供する側のITスキルの向上と、しっかりとした個人情報保護を保障する姿勢が不可欠であることは言うまでもありません。

これからのIT化の行方

三森 定道
(大学工学部教授)

ITは、いつの時代も、人々が広域的そして多様な活動を行うために必要な技術である。古代にもITを駆使した情報システムは存在した。烽火台は通信装置、木簡や粘土板は記録装置、そして官僚組織は処理システムだった。しかし、権力と富を独占する大帝國が、情報システムも独占した。この状況は、ごく最近まで続き、専用通信網と汎用大型計算機を使用し、全国的更には世界的規模で活動できたのは大組織だけだった。

インターネットとパソコンはITの大衆化をもたらした。大衆の手が届く値段まで、IT利用コストを低下させたからである。これら情報システムや情報機器を用いて、電子メール、電子ショッピング、そしてネットサーフィンを行う人は多い。更に、ホームページを開設し、情報収集だけではなく、地域社会を超えた情報発信を行う人も増えている。インターネットは、人々が地域そして国境を越えて活動するためのインフラである。地域社会や組織が与える制約から人々を解放する仕組みでもある。情報社会はITが大衆化した社会であり、産業や組織が変化し続ける社会である。何故なら、あらゆる人々が、ニュービジ

ネスの創造に参加でき、その結果が瞬時に世界中に伝播する社会だからである。「複雑系の科学」の言葉を借りれば、新たな組織が次々と発生し消滅する「カオスの縁」が現れる社会である。情報社会では、既存の大企業や大組織が競争優位の地位を保ち続けるとは限らない。過去からの柵が少ない小企業や小組織が優位となる場合も多い。誰でも自由に行動でき、富や地位よりもアイデアが高く評価される社会だからである。地域を超え、産業分野や系列の枠を超えた企業提携が行われ、ニュービジネスが次々と現れる。金融業の枠内ではなく、流通業や製造業と金融業との間の垣根破壊も進んでいる。サプライ・チェーン・マネージメント・システムは、系列の枠を超えて生産・流通活動を行うための情報システムである。

産業や組織が変われば教育も変わる。産業や組織が大きく変わる情報社会では、知識が陳腐化するスピードは極めて速い。ビジネスマンには生涯教育が必要となり、その教育内容を絶えず更新する必要がある。教育ニーズに対応しなければ、将来、大企業と同じ事態が大学に生じてもおかしくない。

ビジネスマンに対する生涯教育を行うには、大学に新たな仕組みが必要である。それは社会ニーズの変化を把握し易くする仕組みと、現役のビジネスマンが大学の教育・研究活動に参加し易くする仕組みである。例えば、前者はMITなどに見られる大学内でベンチャー企業を設立し易くするシステムであり、後者は平日はインターネット、休日はキャンパスでという複合教育システムである。いずれも、教育・研究情報システムの課題である。

女子大学に学生学部情報メディア学科開設

女子大学では、本年四月に学芸学部情報メディア学科を開設いたします。入学定員は百二十人で、京田辺キャンパスでの開講となります。

●学科の基本コンセプト

この情報メディア学科では、新しい時代に対応して、IT（情報通信技術）を駆使して自己表現し、社会で活躍できる女性の育成を目的としています。

二十一世紀を迎えた現在、コンピュータはますますパーソナル化するとともに高性能になり、携帯情報端末を利用した各種のサービスとともに、我々の日常生活に深く浸透してきています。また、情報通信基盤は急速に整備され、ADSL回線や光ファイバー網により、インターネットでの情報の受信、発信はますます高速化・多様化し、音楽や映像の送受信も日常化しつつあります。各種情報のデジタル化も進み、各種教育ソフトやゲームは言うまでもなく、日常耳にする音楽・映像もデジタル媒体（メディア）に

よるものが圧倒的に多くなり、通信衛星による放送ばかりでなく、地上波による放送もデジタルによる時代を迎えつつあります。

このような時代において情報通信技術および多様なメディアと正面から向き合っている技術者として、その課題と限界を理解しながらもその技術を使いこなす、運用して行く能力を持つ学生の育成が必要となっています。

一方、情報通信技術の習得は、それ自体でも大変価値のあることではあります。が、手段を得ることにばかりありません。重要なことは何を表現するか何を伝えるかということになってきます。幸いなことに情報メディア学科が新設される学芸学部には英語英文学科、日本語日本文学科、音楽学科があり、豊富な教育研究成果（コンテンツ）があります。さらには、学生は現代社会学部、生活科学部の授業科目をも履修することが可能となっています。情報メディア学科の学生はこのよ

うな環境の中で、幅広い教養を身に付け、ものごとを深く洞察する能力を養うとともに、自己を表現する能力や問題解決に当たる能力を身に付けることが期待されています。

自己表現やビジネスを描く分野がデザイン、CG、アート、音楽、語学、文学、ビジネス、広告、コンピュータと社会の関わり、ジャーナリズムなどそれぞれ異なった分野であったとしても、この学科学で学んだ情報通信に関する深い理解を生かして、創造的な社会を構想する。このような学生の育成が目的です。

女子大学は、リベラルアーツを標榜する大学です。近年実学的要素の重要性をも認めてリベラルアーツ・プラスという言葉の方もされています。学芸学部の中に情報メディア学科を新設することは時代の要請にかなったものであると思えます。また、情報通信技術の基礎を習得し、ソフト・コンテンツに女性の感性を生かして行くことができれば、女性が社会で活躍して行く上での強力なパワーになるものと思えます。さらには、そのような能力の基礎があれば、これからの時代は、ライフサイクルに合わせて、



在宅のまま
で、仕事を続
けて行く可能
性も広がって
行くものと思
われます。

初年度の入
学試験では、
公募制推薦入
試では、二十
七人の合格者

に対して二百四十八人の志願者があり、一般入試前期日程では、八十一人の合格者に対して千四百八人の志願者で、一七・三倍という高い競争率でした。このように情報メディア学科の基本的なコンセプトが受け入れられていることが証明されました。

●カリキュラムの構成

情報メディア学科のカリキュラムは、以上の基本コンセプトに基づいて構成されています。専門科目は大きく次の三つの科目群に分けられていますが、相互に深い関連があり、学生は個々人の興味と目的に従って自由に履修することができるようになっています。

●メディアデザイン科目群

知識と感性、創造性を融合させて、映像作品、CG、アニメ、ゲーム、電子音楽など、様々なメディアを利用して創造表現、デザインなどの能力を身に付ける科目が用意されています。「マルチメディア論」「情報デザイン論」「CGデザイン」「アニメ・ゲーム研究」「音響・音楽論」など。

●文化コミュニケーション科目群

マスコミュニケーションやジャーナリズム、放送、広告など現代のコミュニケーションのしくみやその文化的背景を学習できる科目群です。情報通信技術の進展にともなう現代のメディアに社会的文化的側面からアプローチします。「エンターテイメント産業論」「情報産業研究」「CM・放送番組制作論」「広告プランニング」「アナウンス技術論」など。

●ネットワーク・知識情報科目群

インターネットによる地球規模でのネットワーク、モバイルコンピュータ、電子商取引など、情報通信技術に立脚した産業・サービスのシステムについて理解を深める科目群です。「インタ

ーネット構造論」「プログラミング」「ヒューマンインターフェース論」「eコマース研究」「モバイルコンピュータリング」など。

基礎教育科目としては、情報通信技術の基礎を学ぶ情報リテラシー科目群、情報化時代のさまざまな課題を学ぶ情報メディアに関する視野を広げるバースペクティブ科目群、英語での情報メディア運用能力を身に付けるコミュニケーション系科目群が用意されています。また、個々人の目標にきめこまかく対応できるように少人数による教育を重視し、演習（ゼミ）を各学年に配当しています。

高等学校「情報」の教職課程も申請中で、課外の資格取得支援講座では情報処理技術者などの資格講座が開講されています。

この情報メディア学科を充足させるに際して各分野の専門の専任教員八人を新たに迎え、既存学科からの所属変更教員七人に加えて、十五人の専任教員でスタートします。今後この学科が、どのような方向に成長していくかは、学生のニーズや要望によるところが大きくなってきます。多様な可能性を秘めたこの情報メディア学科の将来が楽しみなどころです。